

【大坂の史跡(新たに判明した史跡編)】

坂本龍馬ゆかりの地

1 土佐海援隊 大坂詰所(薩万)跡推定地

西区江戸堀3-1-34付近

＜土佐海援隊について＞

慶応元年(1864)閏5月に薩摩藩の庇護のもとに発足した浪士結社「亀山社中」から、土佐藩の支配のもと「土佐海援隊」が発足したのは慶応3年(1867)4月(10日頃)でした。同時に中岡慎太郎を隊長とする「陸援隊」も組織されています。

(余談ですが、そのおよそ4日後の同年4月14日に長州藩 高杉晋作が病死しています。)

脱藩罪を許された坂本龍馬が海援隊の隊長に任命され、長崎の貿易商小曾根邸に本部を置きました。

武器・軍艦などの兵器の商取引、「閑愁録」などの出版事業など多角的な運営が進められました。

そのため、長崎の本部をはじめ、京都・下関・大坂などに詰所(出張所)を設けました。

京都の詰所(出張所)は材木商 酢屋、下関の詰所(出張所)は大年寄 伊藤助太夫邸の一室「自然堂」に設けていました。

大坂の屯所は薩摩屋万吉(万兵衛という説あり)で通称「薩万」と呼ばれる商家に設けました。

「薩万」は人足差入屋・宿屋などの説があります。しかし、史料が少なくこれまでどこにあったのか場所の確定がなされていませんでした。



坂本龍馬像(左:京都府)中:(京都府、現存しない)、右:(高知県)

＜土佐海援隊 大坂詰所(薩万跡)について＞

数年前から主として大阪市立中央図書館に通い、さまざまな史料等を収集し、また、大坂史跡を研究する諸先生や、図書館員の方々にご協力をいただきながら研究してまいりました。

(大坂での勝 海舟寓居先である「専稱寺跡」も同様でした)

所在地のヒントとなったいくつかの史料を紹介いたします。文中にポイントとなる箇所を太字と下線で示しました。

史料1 「坂本龍馬全集」平井道雄監修(光風社出版)P554～556を抜粋
「実話雑誌」(非凡閣発行、昭和六年四月創刊、月刊誌)九月号
安岡重雄(海援隊士安岡金馬の子)著

私は母から、薩摩屋のおりせといふ名を聞いて居た、そのおりせについて、お良さんはこんな話をした。「世間には余り知られて居ないけれども、お登世さんよりもおりせさんの方が、どれ程勤王の人達を助けたか知れませんが、寺田屋のやうに目に立つ事件が起こらなかつたから、自然世間の注意を惹かなかつたけれども、**おりせさんは侠客肌の女で、熱心な勤王最良**でした。そのおりせさんに一番世話を焼かせたのは、伊達要之助(陸奥宗光)さんでしたよ。」

このおりせは、良人の万吉と共に、大阪にある薩摩の花屋敷のお出入で、屋敷の門前に、**薩摩屋**といふ屋号で、**人足差入れの稼業**を営んで居た。

同志の人々は、その頭文字を取って「**薩万**」と呼んだ。

坂本や、中岡や、其他海陸両援隊の人々は、京都で伏見の寺田屋、大阪でこの**薩万**を隠れ家にして居た、**おりせはお登世に一層輪をかけた男勝り**で、度胸もあつたし。惻巧で、勝気で、浪人の世話は、一切おりせが引受けてやつた。かうした女の亭主にあり勝ちな、万吉も好人物(おひとよし)の無口の男だつた。

稼業が人足の差入れだから、薩万の二階にはいつも若い奴がごろついてみた。

足繁く他人が出入をしても、怪しまれる憂ひがなかつたので、浪人達は、こゝを屈強の隠れ場所にした。伊達要之助は、幕府方に逐はれて、この薩万に逃込んだ。

詮議が厳しい、岡つ引の鵜の目、鷹の目である。薩万の周囲を、夜となく、昼となく、うさん臭い男が徘徊する。片時も油断は出来ないで、おりせは要之助を押入の中に隠して三度の食事を自分が運んだ。着の身着の儘、垢に塗れ、虱が湧いて、押入の戸を開けると強烈な臭気が鼻を衝く、かうした押入の生活が、月余に亘ると、要之助は退屈でたまらなくなつた。陽の光が見たい、晴れた空を仰ぎ度い、さういふ衝動が、全身をうづうづさせた。

「え、どうなるものか！」と捨鉢になつて、或日こつそり押入の中から這ひ出すと、窓を開けて、てすりの外へ首を出した。

そこは裏二階の、下が川で、どす黒く濁つた水が、ゆるい流れを見せて大川につづいて居た。

その時である、要之助は挙動不審の男を見た。男は中年の紙屑買ひであつたが、河岸に佇んで、二階を見上げた瞳に、要之助の魂をわななかせる鋭い光があつた。「失策(しま)つた」と思った。

要之助はすぐ首を引いた。おりせが夜の食事を運んで来た。要之助の話を知ると、おりせは忽ち顔の色を変へた。

「あの紙屑買ひなら、私も不思議な奴だと思つて居ました。毎日のやうにやつて来て、薄気味の悪い眼付で奥を覗くのです。もうかうしては居られません、今晚すぐ船でお逃げなさい」

「飛んだことをしてしまつた。つい明るい世界が見たくなつたものだから！」夜更けて要之助は、裏河岸から、こつそり小舟に乗移つた、船頭は薩万腹心の若い男だつた。

「一方ならぬ世話になつた、忝(かたじ)けない」「気をつけて往らっしゃいよ、では、お達者で！」見送るおりせの眼に、熱い雫があつた。それから僅に二十分ばかりでも経つて、不意に薩万へ捕方が踏込んで、天井裏から縁の下迄捜査したがおりせは眉一つ動かさなかつた。(以下省略)



史料2 「定本坂本龍馬伝」 松岡 司著(新人物往来社)
「大極丸一幕」P491、「海援隊」P533～535

船は大極丸と名づけられ、高松太郎を大坂駐在としてさっそく長崎から離れる。(途中省略)
太郎と安岡金馬が大坂・土佐堀二丁目の薩摩屋へ駐在し、いよいよ船を使った社中の営利活動が始まったのだ。

◎社中商法

かわって、社中は西海を舞台に商事活動をつづけていた。長崎の小曾根氏が二千六百両をもって購入した大砲を馬関へまわす仕事で、社中はこれを請負でおこなつたか、小曾根より四百両を借りている。もっとも本当の四百両の出所は、神戸の商人(二ツ茶屋村で回船業を営む)成尾屋与三郎だつたようだ。このことにかかわる一通の覚書があり、薩摩藩小松家会計方愛甲新助なる者から受けとつた千五百両の支出先が記される。

渡し先と用途	金額
豊崎屋	千両
中村(近江行・白糸手付)	三百両
陸奥陽之助(京出張)	五十両
高松太郎(薩万へ三十両、小使二十両)	五十両
合計	千五百両

高松太郎の五十両は、個人的に必要なため借りたものだ。二月十五日、陽之助と太郎が代表してこの千五百両の証文を新助へ入れている。右の太郎の用途先にある薩万というのは薩摩藩出入の人足稼業「薩摩屋」で、主人を万吉ということから薩万と愛称された。(途中省略)社中は、ここを出張所がわりに使っており、太郎は大坂へ出れば常駐する。「おりせ」という「おとせ」に似た女がいて、いつも太郎や陽之助が面倒をかけていた。

そのほかわずかではありますが、薩万については触れた史料を見る限り、「薩万」は薩摩藩の屋敷前に隣接、または向かいにあった確率が高いと思うようになりました。

しかし、古地図では各藩の蔵屋敷など大きな屋敷しか示しておらず、商家は省略されています。この時代の水帳が保存されていれば、確認が取れるのですが、大阪市立中央図書館員のお話によると現存していないとの事でした。

上記史料の文中で「土佐堀」「大川」「裏が川」という言葉が確認できますので、土佐堀にあった薩摩藩蔵屋敷(上屋敷)【当時:土佐堀2丁目、現在:大阪市西区土佐堀2-3】の周囲であった可能性が高いと思っていました。

ところが、ある史料により可能性の高い所在地が判りました。これまでまとめた経緯が次のとおりです。

「土佐海援隊大坂詰所 薩万跡」の所在地判明までの経緯

- ①調査開始は1999年より、勝 海舟寓居跡と同時進行。
- ②「坂本龍馬全集」「定本 坂本龍馬伝」「坂本龍馬大事典」「坂本龍馬日記上巻および下巻」
あらゆる坂本龍馬の史跡に関する本をチェックしましたが、最初の段階では、薩摩藩蔵屋敷の門前、または隣接した場所に「薩摩屋」という人足差し入れ稼業の店があり、そこに高松太郎などを常駐させ、海援隊の大坂詰所にしていたということだけしかわかりませんでした。
- ③お龍の回顧録
「世間には余り知られて居ないけれども、お登世さんよりも、おりせさんの方が、どれ程勤王の人達を助けたか知れません。このおりせは、良人の万吉と共に、大阪にある薩摩の花屋敷のお出入で、屋敷の門前に、薩摩屋といふ屋号で、人足差し入れの稼業を営んで居た。
同志の人々は、その頭文字を取って「薩万」と呼んだ。そこは裏二階の、下が川で、どす黒く濁った水が、ゆるい流れを見せて大川につづいて居た。」
- ④「岡内俊太郎より佐々木高行あて」の手紙
「(前略)私、龍馬、作太郎等は薩邸の前に薩摩屋といふ一小家ありて、此家に行き、高松太郎、白峰駿馬、管(菅)野覚兵衛、長谷部卓爾等居合せ居り、将来の事を戒め含め置き、大坂を発して京都に登り、龍馬は作太郎と共に木屋町に宿し、戸田は知人の宅へ参り、私は藩邸内に止り申候。」
- ⑤大阪商業大学商業史博物館へ水帳の閲覧
判明できず
- ⑥大阪市立中央図書館、大阪府立中之島図書館、大阪歴史博物館、坂本龍馬記念館などあらゆる公共施設へ調査依頼
しかし「詳細を確定するのは資料不足で不可能です」との回答。
- ⑦薩摩屋半兵衛と法性寺
当初、「薩摩屋」という屋号を持つ商家は1軒のみと思っていたが、そうではないことが判明。
法性寺や薩摩屋半兵衛邸に坂本龍馬を匿ったと記載された本があり、薩万は薩摩屋半兵衛と深い関係があると考えようになりました。
- ⑧大阪商業大学商業史博物館へ再度訪問。「薩万」について調査依頼。
「仁風便覧 天保八年版(町別に商人が所有する一覧表にした本)」を取り出し、3箇所、薩摩屋半兵衛の所在地を見つけてくださいました。驚いたのは、3箇所とも薩摩藩蔵屋敷の上屋敷・中屋敷・下屋敷が所在する近くに土地を所有していました。
- ⑨薩摩屋半兵衛の一族の調査
薩摩屋半兵衛の一族の中で万吉あるいは万兵衛が弟や次男坊にいて、店を任せ「薩万」と呼ばれたのではないかという推測をたてました。薩摩屋半兵衛(川端家)の菩提寺である法性寺さんにご無理をお願いし、薩摩屋半兵衛の子孫にあたる川端家の「薩摩屋半兵衛の家系図」および、その中に、「万吉」とその妻「おりせ」の名があるかどうかの調査依頼をお願いしました。
1ヵ月後回答があり、川端家の発祥から現在に至るまでの家系図および詳細を送っていただきました。

⑪水帳絵図の発見

同時進行していた天満八軒家船着場の船宿について調査をご依頼していた大阪歴史博物館の学芸員Y氏からあるサイトをご紹介いただきました。堺屋の特定につながる水帳絵図が入っているものでした。

⑫専門家(お二人)にご相談

その最後の数枚に土佐堀の薩摩藩蔵屋敷(上屋敷)の絵図面が4枚入っていました。Kさんは古文書を解読する講師も務めておられるので、この絵図面を送付し「薩万」につながる箇所が無いかどうか無理を承知で調査依頼をしました。早々に調べていただきました。

⑬<薩摩藩蔵屋敷の門前にあったのか>

古地図では、蔵屋敷と濱屋敷が載っています。厳密に考えて蔵屋敷が該当するとすれば、表門の前は土佐堀川です。裏門の前は濱屋敷で、薩万どころか、他の商家も存在しようがありません。太原屋は蔵屋敷の裏門の門前ではありませんが、裏門の西にあり、蔵屋敷と濱屋敷の両方からとても近い立地です。門前という言い方も許容範囲に入るのか。

⑭<裏二階の下が川>

太原屋(万右衛門か)は江戸堀五丁目大道を挟んで、南北2軒を所有していますが、そのうちの南側の屋敷の裏は江戸堀川になっています。お龍伝聞証言のポイントである条件に、太原屋がほぼ合致している、少なくとも矛盾はしていないのではないかと思います。とKさんからご意見を頂戴しました。

⑮「薩万」は果たして薩摩藩の記録にあったか・・・

「薩摩屋」というのは薩摩藩側の史料は不思議なくらいできません。ですから、「薩摩屋」というのは、「薩摩藩御用達」の意味かもしれないと推測しています。「薩摩屋」は、薩摩藩以外に対しての総称ではないでしょうか？また、「薩万」という呼び方も、薩摩藩士の日記などでは見かけないため、龍馬ら海援隊士たちが名付けた名前なのかもしれません。「名代(なだい)」というの、蔵屋敷地の名義人という意味ではないかと思いますが、もっと広義に解釈するのもかもしれませんね。「薩万」は、浜屋敷のある江戸堀川沿いにあった可能性が高いですね。「蔵屋敷」が上屋敷で、「御殿」などと呼ばれていたところなのでしょうね。そうすると、「浜屋敷」には、船入りがもうけられていて、御座船等が停泊していたのかもしれないですね。おっしゃるように、太原屋が合致しますが、まだ、中屋敷の可能性も ありますので、もう少し保留にさせて下さい。とMさんからもご意見を頂戴しました。

⑯「大阪中央図書館」に薩摩藩蔵屋敷(上屋敷)の寸法の問い合わせ。即日、「諸事書留」という史料に記載有りとの回答をいただきました。北側が55間、南側が60.5間、東側が37間、西側が35間のやや台形でした。越中橋の筋(東橋から60.5間と町境の道3.6間を現在の寸法に換算すると116m54cm)から西へ実測しましたところ、薩摩藩邸の西端は、あみだ筋にかかります。なお路地があり、薩万の所在も現在のおみだ池筋の北向き車線になります。

